

## 批評と紹介

吳滔著

### 『清代江南市鎮与農村關係的空間透視』 ——以蘇州地区為中心——

佐藤 仁史

一

江南農村を対象とした研究は膨大な成果を積み重ねてきた。それらは、地主制を中心とする土地關係、抗租・抗糧などの民衆闘争史、賦役制度史、江南市鎮の叢生と發展など多岐の領域にわたっている。これらの個別研究は学界に大いに裨益したが、地域社会史という観点からみた場合、一部の研究をのぞき市鎮と農村との相互關係を十分に検討してきたとは言い難い。江南地域史研究に存在するこの課題を克服するために、著者は空間性という視角から十数年來取り組んできた。その成果をまとめた本書は、様々な領域にわたる先行研究を確実に消化しつつ、柔軟で刺激に満

ちた挑戦を展開した意欲作である。

二

ここでは本書の概要を紹介する。まず本書の構成を示すと次の通りである。

緒論

上編 制度与歴史

第一章 “專業市鎮” 興起的機制

第二章 “鎮管村” 体制的形成

第三章 分廠伝統与市鎮区域之塑造——以嘉定宝山為

例

下編 空間与人群

第四章 村廟与鎮廟——從民間信仰透視城鄉關係

第五章 “二田兩主” 制和主佃關係的新格局

第六章 在城与在鄉——士紳的生活空間及對鄉村的影

響

結語

緒論では、江南地域社会史に関する中国、欧米、日本の先行研究を整理し、それらの成果と課題を提示している。著者に拠れば、明清江南市鎮研究の多くは個々の市鎮の發展経緯を記述する「伝記式」のスタイルを採ってきており、「城鄉關係」すなわち市鎮と周辺農村との相互關係を歴史

的文脈のなかに位置づける作業が不十分であったという。

上編は、国家の行政体系と市場システムとを統一的に捉えようとしたW・スキナーによる靜態的モデルを超え、特定の歴史的な文脈から地域變動に分析を加える。

第一章は、商工業分業化の進展とともに登場したと捉えられてきた「專業市鎮」の生成過程を分析している。帰有光の『論三区賦役水利書』における建議を手がかりとして、崑山県と嘉定県との交界地帯にある安亭・陸家浜の二鎮を事例として取り上げている。これらの地域では水路への砂の堆積による影響から稲作が不振となり、棉花栽培が主要となっていた。また賦役改革に伴い官布による代納が進められたために、棉花・棉布を交易する安亭・陸家浜が專業市鎮として出現したとし、制度改革が市鎮の勃興を促した側面も重視すべきであると主張する。

第二章は、市鎮が周辺の村落を管轄する体制（「鎮管村体制」）形成の経緯を通観する。明初に成立した郷都区などの賦役制度に基づく行政区域が一条鞭法の施行に伴って変容しつつあった一方で、市鎮は行政制度上には位置づけられていなかった。明中葉以降は市鎮を中心に広がる地域意識が形成され、乾隆年間に入ると「鎮管村体制」下での有力者による公共事業は地域行政における中心的地位を占めるに至った。清末の地方自治制の施行に伴い、「鎮管村

体制」は鎮・郷自治区として正式に行政区画となった。しかし、設定の根拠となった「固有の境界」ほどの基準を持ち出すかによって様々な解釈があり得たという。

第三章は、市鎮空間の形成過程を嘉定県・宝山県にみられた「廠」という慣行に即して分析している。「廠」慣行は、康熙十年に嘉定県において飢民救済のために粥廠が設置されたことに始まる。嘉慶二十年に至ると粥廠は常設化され、その救済地域も固定化されるようになった。粥廠を管轄する廠董は清丈や水利、徴税といった「地方公事」をも職責とするようになった。清末地方自治制の郷・鎮自治区の設定に際しては、嘉定・宝山両県では基本的には「廠」の領域が「固有の境界」として継承された。このような事例は江南の他地域にはみられないものであり、当該地域の歴史的な文脈に対する注意を促している。

下編では、市鎮と農村との関係の空間性に焦点をあてて様々な社会関係を分析している。

第四章は、民間信仰の領域性から市鎮と農村との関係を分析している。明末から民国期にかけての江南農村では、市鎮の城隍廟・東嶽廟の廟会に際し周辺農村の村廟（社廟）の神明が銅銭や紙銭を納入する「解錢糧」慣行が形成されていた。従来、この慣行は上位廟と下位廟との関係とみなされ、周辺農村に対する市鎮の影響力の強さの証左と考え

られてきた。本書はこの枠組みを首肯しつつも、鎮廟の影響力を過度に評価するあまり、村廟が民間信仰において果たした役割を過小評価していたことを指摘し、相当大きな自主性を有する村廟も少なくなかったことを著者自身による現地調査の成果から説明している。<sup>(1)</sup>

第五章は、社会経済史と法制史の領域において検討されてきた一田両主制における地主―佃戸関係を、城郷関係の空間性から読み直す試みである。著者は一田両主制形成の要因の一つとして、「詭寄」「花分」の流行や均田均役法といった明末清初における諸制度の影響を重視すべきであると主張する。城居地主への土地集中の進展に伴い、庇護―従属という顔の見える租佃関係が、お互いに顔を知らず、したがって「感情」の影響を受けない純粹な「契約関係」へと変化したことが城郷関係の特徴として指摘できると言う。そして抗租の発生や租棧の出現、収租への官権力の介入もこのような文脈で読まなければならないとする。

第六章は紳士層の城居化を扱う。著者に拠れば、地主層城居化の事実は学界の共通認識となっているものの、実はその具体的な過程は判然としなかった。本章では呉江・震沢両県を事例とし、商業経済の進展、紳士層の住居の変動、太平天国後の捐納制度の変化、地方公事の担当者の変遷といった角度から分析する。地方紳士が城居を選択した要因

はもっぱら租田収入に依拠する生活様式が必要とする安全上の要求からであり、太平天国後にはこの傾向にさらに拍車がかかった。そして紳士層は農村社会をコントロールする能力も意欲も喪失していき、国家による地域社会への介入に、より大きな余地を与えたと結論する。

結語では、城郷一体論や城郷二元論といった極度に単純化されたモデルから分析されてきた江南の市鎮―農村関係について、従来の研究の限界を突破するために、地方行政運営の「機制」(メカニズム)に留意しつつ、地域の歴史過程における動態のなかで位置づけることの重要性を主張している。

### 三

次に、本書の意義について三点にわたり述べる。

第一は、制度と地域社会との相互関連の変遷を丁寧に追跡した点である。著者の視角は、「『專業市鎮』が興起したメカニズムは、…賦役改革と地域社会の変化という視角からみることにより、ようやく明中葉以降において江南市場が成長した深層の原因を真に示すことができる」(七四頁)という提起に集約されている。県―都―函という里甲制を土台として設定された戸籍管理の系統と、県―郷(都)―村という地域社会の組織系統との、地方志に明示

されない相互関係が整理されたうえで、清中期には市鎮は地方公共事業の中心地としての地位を固め、前者の系統を凌駕するようになったことが示されている（二一八頁）。他方、嘉定県・宝山県の「廠」の領域性に示されているように、前者の区画は清末に至っても依然として一定の空間根柢となっていたことは、著者が「廠」（の管轄領域）はこの意味においてもとの行政区画に取って代わったものでなく、伝統社会の有した柔軟性が端的に表れたものといえよう」（一七五頁）と述べる通りである。従来の江南市鎮史研究において十分では無かった両者の相互関係を一方的な消長という関係ではなく、相互の錯綜した関係として単純化せずに捉えたことが著者の真骨頂である。

第二は、空間という角度から地域社会史にアプローチする、いわば地域の全体史を試みた点にある。各章で扱うテーマは、專業市鎮の形成と発展、賦役制度との変遷と農村社会、慈善の領域性、廟会を中心とする民間信仰、一田両主制と抗租、紳士・地主層の城居化と多岐にわたるが、空間という切り口からこれらを「横断的」に分析することで、地域社会の複雑な様相が浮き彫りにされている。市鎮と農村との関係は、費孝通が指摘した「郷脚」が与える印象が強すぎる嫌がある。そもそも「郷脚」の広がりを考える上で、「定期船がそこに及ぼす役割を相当軽視してきた」

（七九頁）という問題点があり、明代と清代では「郷脚」の距離は異なる。また、経済面における相互依存性と相反的に、租佃関係からみると城・鎮の地主と佃戸との関係は時には対立的であった。これらも本書のテーマ横断的アプローチによって浮かび上がってくる江南農村の特徴であろう。「郷脚」が固定的な領域として捉えられるようになった一つの背景には、清末の地方自治区設定に伴い、さまざまな「固有の境界」が主張されたことがあったことを指摘した点も、時代の変遷と絡み合いながら様々な空間が創出された側面を浮き彫りにした本書の重要な貢献の一つといえよう。

第三は、使用されている史料と、史料の読み込みの土台となったフィールドワークについてである。史料における最大の特徴は、族譜、日記、地方新聞、檔案・公文を編集した抄本といった従来十分に利用されてこなかった史料を博搜・活用したことにある。これらの史料の少なからぬ部分は県レヴェルの図書館・檔案館・博物館に所蔵されているものであり、著者によってはじめて活用されたものも少なくない。もう一つの特徴は現地において史料を読むという方法である。市鎮街区の成長に伴って境界に設けられた水柵の位置が変化したことに関する指摘（八五―八七頁）に鮮やかに示されているように、現地を歩きながらテキスト

トを読み込むことで得られた発想が随所で見受けられる。著者は長年にわたり江南の市鎮や農村においてフィールドワークを進め、多くの口述記録を有しているが、敢えて禁欲的態度をとり、現場で史料を読むことにこだわったのも本書の特徴といえる。

#### 四

議論すべき論点が多いが、ここでは、清末の城鎮郷自治区設定に際して根拠とされた「固有の境界」をめぐる主張の背景と動機について、本書とは異なる観点から考察した評者の拙稿をもとに二点にわたり若干の議論を行う<sup>3</sup>。

第一は、「固有の境界」をめぐる城自治区と鎮・郷自治区との関係を視野に入れる必要性についてである。城区の設定に際しては「城廂」をどのように解釈するかによって、城濠と接する地域の処遇に対する態度が異なった。例えば、嘉定県西門廠の有力者は当初、西門、澄橋、石岡門三廠と城内とを併せて城区として申請した。しかし城内の有力者が濠の内部を城区とすべきと反対したため、西門廠側は単独で郷自治区となすことを建議し、「西門が独立して自治区を設置することを謀る者はもともと多数を占めていたので、良い機縁を得て円満の目的を達成したことを深く喜んだ」という<sup>4</sup>。

愚見では、この背景に、城区の主導権をめぐる西門廠の有力者と城内の有力者との確執を読みとることも可能であると思われる。すなわち両者とも県城＝城区が県政において有する卓越性を認識しており、自らに有利な設定をすることで城自治区への影響力を行使しようとしたことも垣間見られるのである。武陽や無錫で発生した城自治区設定問題ではむしろ城区側が城濠の外に広がる城廂を城区に入れようとしていた。このことと比較すると、上記の嘉定県の経緯は様相を相当異にしている。このような城区の動きを視野に入れた場合、市鎮と農村との相互関連のみならず、濱島敦俊が「県社会」と表現する城区の動向を視野に入れて分析することも必要であると思われる<sup>5</sup>。

第二は、郷区の設定の際に持ち出された「固有の境界」をどのように考えるかである。著者は、自治区の設定に際する矛盾の背景が「一つは地方の文脈で運用される区画である。『廠』、もう一つは国家の文脈において行政管理の手段として運用される区画の『郷鎮』である」(一七一頁)としている。ここで用いられている史料は別の読み方も可能のように思われる。袁世凱による地方自治停止後、嘉定県の自治を主導していた黄守恒は自治区設定の経緯について総括し、あるべき自治の姿について、「郷自治区域が小さすぎると人材・財力の両面において立ち後れ、事業は発

展しがたく、土豪の専横を招きやすくなるので、もとより上策ではない」「将来自治が復活した暁には全境を精密に測量して区画整理を行うことによって、固有の区域を廃止し適切な面積を確定することができれば、我が県の自治〔が抱える問題も〕は漸く解決する」と述べていることは注目に値する。<sup>6)</sup>ここでは、廠域という「固有の領域」は死守すべきものとしてとらえられておらず、地域が発展するための適正なサイズの自治区を設定することが地域の側から提起されていたことに注意を払わなくてはならない。

また郷区の設定をめぐる事例として取り上げられている章練塘において、県城との連絡が正しくなされること、地域を発展させる鍵であるとみなされていたことは示唆に富む。行政システムの中に地域が正しく位置づけられ、「自治が推進されなくても」上はこのことを追究することなく、下もこれを難詰することがない」という事態にならぬよう、「上」⇨官と「下」⇨地域とが連携し合うことが地方自治を推進するための核心であると考えられていたのである。<sup>7)</sup>したがって、行政と地域には対立という軸以外にも、相互連携が希求される関係性もあつた点にも注目する必要がある。

以上のように、清末民初の「固有の境界」をめぐる地域意識は依然として検討すべき問題として残されているので

ある。

##### 五

以上、十分に討論できなかった部分も少なくないが、本書が「伝記式」研究の持つ限界を克服し、江南地域社会史研究を前進させた作品であることは伝わったと思う。検討されているテーマが多岐にわたるため、それぞれについて掘り下げるべき論点は少なくない。また本書は清代を通じてするなかで近代中国も論じられており、清末民国史研究との対話も必要となろう。本書の提起が関連領域において活発な議論を喚起することを期待したい。

##### 註

(1) 著者と評者などによる現地調査の成果については、佐藤仁史・太田出・稲田清一・呉滔編『中国農村の信仰と生活——太湖流域社会史口述記録集』汲古書院、二〇〇八年、参照。

(2) 呉滔「在田野中閱讀江南鄉鎮志」『中国人類学評論』一二輯、二〇〇九年。

(3) 佐藤仁史「清末における城鎮郷自治と自治区設定問題——江蘇蘇屬地方自治籌辦処の管轄地域を中心に」『東洋史研究』七〇巻一号、二〇一一年。

- (4) 黄守恒『謀邑編』(一九一六年鉛印本、上海図書館蔵)卷五、西門鄉籌備自治進行記。
- (5) 濱島敦俊『總管信仰——近世江南農村社会と民間信仰』研文出版、二〇〇一年、二七五～二七六頁。
- (6) 黄守恒『謀邑編』卷三、呈知県姚復陳鄉自治各区未便合併情形文(辛亥正月)。
- (7) 『章練小志』卷一、区域沿革、鄒銓「上蘇省地方自治籌辦処条陳請將章練塘鎮之元江二邑併青浦事」。

(二〇一〇年一〇月、上海、上海古籍出版社、A5判、三三七頁)

(一橋大学大学院社会学研究科准教授)